注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
東方妖精旅

【作者名】
冥月

【あらすじ】
妖精に転生？憑依？してしまった主人公の物語

生まれ変わってしまったようだ

気が付いたら私は森の中を漂っていた私はたしか家でアイスを食べていたような気がする確かというのは記憶が曖昧だからだ。記憶などははっきり覚えているのだがなぜここにいるのかは思い出せない

とりあえず私は周りの状況を確認しようと思った。

「ん、なんだろあの光ってるの」

私の周りには光の玉がたくさん浮かんでいた。

その光の玉をよく見るとただ浮かんでいるだけではなく光どうしが遊んでいるようにも見えた私がその光の玉を触ろうと近づくと

「あっ・・・」

その光は私を避けるように遠ざかってしまった

私はショックを受けながらここにいるのは場違いな気がして私は移動を始めた

「でも、本当にここどこなんだろう」

私は飛びながらそんなことを考えた

「・・・ってなんで私飛んでるの」

私はなぜ今まで飛んでいるのに疑問を感じなかったのかが疑問だったが今はとりあえず確認をすることにした

そしたら自分の体に羽が生えているのに気付いた

「羽！」

私はどうやら人間ではなくなったようだ

私はとりあえず地面に下りることにした

「あれ、なんか視点が低くない？」

私はいつも見ている視点より何か少しどころかかなり低くなっていることに気付いた

「私、縮んでるの？それもかなりえっとこれやばくない？」

私は身長が縮んでいることにかなりパニックになったがその時茂

みから物音がした
私はびくっとなりながら茂みから離れようと静かに移動した
「ぱきっ」
私は枝を踏んでしまったようだ
茂みから人のような人ではないような不気味なものが出てきた
「ひっひっひ、これはついてるぜ妖精じゃねえか」
そう言うと不気味なものは近づいてきた
私はこのままではまずいと思いながら時間を稼ぐために話掛けることにした
「あのすいません、あなたは誰なんですか？」
私がそう言うと不気味なものは意味が分からないみたいで首を傾げた
「誰だと？俺は妖怪、お前は妖精それ以外の何者でもないだろ。俺はお前を食べ妖力をもらう」
そういって話は終わりといわんばかりに近づいてきた
しかし私はそれどころではなく、妖怪？妖精？妖力？どういうことか考え事をしていたがしかし妖怪はそんなことお構いなしに私にとびかかってきた
私は考えることをやめ空に逃げた
「お前ずるいぞ、おりてこいや」
妖怪さんは何かわめいていたが私も襲われるのはいやなのでそのまま逃げることにした。
「あの妖怪さんが言ってましたね、私が妖精というのは一体どういうことなのでしょう」
私はしばらく考えていても全く分からなかったのでひとまず考えるのをやめどこか安全そうなところを探し地面に下りることにした。
私は地面に下りてのどが渇いたので何か飲むものを探すことにした
運よく近くに川がありそこでのどの渇きを潤すことにした
「これからどうしよう」

私はこれから行く当てもなく川を見つめた
「誰？」
川に映った姿を見て私は驚いた今までの自分と全く違う姿が写っていたからだ
身長はやはり縮んでいて先ほど確認した羽は鳥のような虫のようなよくわからない羽で髪も緑で服装も変わっていた白いシャツに青い服をきていた
私はどうやら生まれ変わったようだ
私は驚き暫く呆けていたがいきなり頭の中に何かが入り込んできた

・力を操る程度の能力
・移す程度の能力

頭の中に浮かんできたがなにこれとは思わなかった何故か自然に使い方が分かった
力を操る程度の能力は言葉の通り力とつくものを操ることができるようだ
移す程度の能力は言葉にしずらいのでいづれ分かる時が来ると思う
ひとまず私は力を操る程度の能力で先ほど妖怪さんに言われた妖力というのを試してみることにした
そしたら自分の中から変な力がわいてくるような気がした
何かどろどろしているが力強いものだった
「これが妖力か、すごいですねこれ」
私は妖力でしばらく遊んでいたがいきなり妖力が自分の中から抜き出るような感じがして手のひらに光の玉として出てきた
「なんですかねこれ？妖力の塊というのはわかるのですが？」
私はその光の玉を放つことにした
ドゴン
光の玉が当たった木が粉々に砕けてしまった

「何、これ」
私は驚いて地面に座り込むといきなり後ろから何かがとびかかってきた
「わっ」
私は押し倒されて抑え込まれてしまった
そこにいたのはさっきの妖怪さんでした
「妖怪さん離してください」
私がそう言うと妖怪さんは
「やなこった、お前を食べさせてもらうぜ」
といい私に口を近づけてきた
「いやっ」
私はそう言うと腕力を上げ妖怪さんを弾き飛ばした
「なんだと、俺が妖精ごときに力で負けただと」
そういい私を警戒したのか今度は襲い掛からずに私から距離をとった
「今日は見逃してやる、俺に食われる前にいなくなるんじゃねえぞ」
といい、森の中へ帰っていった
私は先ほどのことを思い出すと怖くなり腰が抜けて立てなくなってしまった
暫くそうしていたがやはり運がよいのか誰も襲ってこなかった
私はこの森が怖くなりこの森から抜け出ることにした

そしてしばらくすると洞窟を見つけた私はこの中に誰もいないことを確認するとこの洞窟に住もうと思い入り込んだ
「意外と広いですね」
私は洞窟の中に入りその洞窟が意外と広いことに少し驚いた
そこで私はしばらく過ごしていたが偶に妖怪さんとは別の妖怪がやってきて私を見ると襲ってくることがある
私はまず話しかけてそれでも襲ってくる妖怪は追い払うことにしている
力の使い方も覚えてきて今では大体の妖怪は簡単に追い払えるよ

うになった
ただし妖怪さんは何故か簡単には追い払うことができず結構時間がかかってしまうそしていつものように
「今日は勘弁してやる」
といって森の中に引き返していく
正直なところ私はとても暇なので妖怪さんだったらしばらくここにいてほしいと思っている
もちろん襲ってこなければだが
食事などは必要ないみたいだが偶に食べたくなるので川で魚を捕ったり果物をとったりしている

また妖怪さんがやってきた
「今日こそお前を食べてやる」
そう言って私に襲い掛かろうとした
「ちょっと待ってください、少し話をしませんか」
といったら、妖怪さんは止まり
「なんだ、早く話せ俺はお前を食べたいんだよ」
私は何とか食べられたくはないので
「なぜ私を襲うんですか」
と聞くといきなり妖怪さんは笑いだした
「なんでって、お前の持っている妖力がほしいからだよ」
と言ってきたので
「なら私の妖力をあなたに分ければ私を襲うことはないんですね」
といったら妖怪さんはしばらく考え
「まあ、そうだな。もう話は終わりかそろそろいいか」
といってまた戦闘態勢に戻った
「私の力であなたに妖力を渡しますから私の話し相手になってくれませんか？」
そう言うと妖怪さんはきょとんとし、また笑い出したそしてしばらくし落ち着くと
「いいぜ、その条件なら。だが先に妖力を渡せ、それから話し相手に

なってやる」
私は移す程度の能力で妖怪さんに妖力を移した
「これはすげえ、ものすごい量の妖力だ」
何か興奮していたがしばらくたつと落ち着いたのか私に近づいてきて、目の前に座った
「ありがとうございます」
私がそう言うと妖怪さんは
「ふん、これは条件だからだ今日限りだ」
と言ってきたので
「なら話してくれるなら毎回妖力を移します」
私は妖力を操れるので実際のところは妖力は無限みたいなものだ
「俺の気が変わらないうちならいいぜ」
といってきた。私はよかったと思いながら
いろいろ話をすることにした。
それで分かったことは
・妖力というものは全ての妖怪がもっている
・私は妖精というものらしい
・人は存在するらしい
他にもいろいろわかったが大まかにはこの3つだ
なにより人がいるというのはかなり嬉しかった
私は人に会いに行こうと思ったが妖怪さんが言うには
「あいつらは、人以外のやつは全て妖怪だと思っているぞ。近づいただけで攻撃されるぞ」
といってきたが、私は大丈夫だといい人が住んでいるという村に向かった

私は村が見える位置まで近づいた
私は歩いて門番のところまで歩いて行った
すると門番がこちらに気付き槍を向けてきた
「私は悪いものではありません」
というと、門番は余計に警戒し

「うるさい、妖怪お前らはこの世にいてはいけないんだ」
と言ってきた
「私は妖怪ではありません。妖精です」
と言うが門番はそんなことどうでもいいとばかりに
「うるさい、妖怪だろうと妖精だろうと危険なことには変わりない」
といって槍で攻撃してきた
私はその槍を避けそのまま洞窟に引き返した
「だから言っただろう、人間どもは俺らのことは厄介者にしか思っていないんだよ実際そうだからな」
といってもう話すことはないと森の中へ帰っていった
私はショックを受けていたがしばらくすると立ち直り
今度は計画を練って里に行こうと思った
私はそれから何年かに1度行ったがなかなか門番に通してもらうことはできなかった
「こっそり入るのは簡単だけどなんか負けた気がするんですよね」
と思いながら洞窟にまた引き返した

私はここ数百年近く人間の里にはいっていない
見たところここはかなり前の時代みたいだったから何千年かすると大丈夫だろうと思いそれまで待つことにした
暫くしているとまた妖怪が来たと思ったが、なんか落ち着いた感じの妖怪だった
「すいません、こちらに妖精がいると聞いたのですが」
といってきたので、話の出来る妖怪かなと思い私は妖怪の前に出ていった
「なんですか?」
私が聞くと妖怪はいきなり頭を下げてきた
「あなたの力を私たち弱小妖怪にかしてください」
といってきた
私は意味が分からなかったのでどういうことか詳しく聞くと
なんでも妖怪たちが人間を襲うということらしいが弱い妖怪たち

は戦いたくないらしいが強いものが無理やりたたかわせようとするのでこのままでは自分たちが死んでしまうと思い抵抗するために力を貸してほしいということだった
「でも私妖精ですよ」
　というと妖怪は構わないと言ってきた
「私たちはもう妖怪だとか妖精だとか言ってられませんこのままでは私たち弱い妖怪は死んでしまうのですからどうか私たちに力を貸してください」
　と言ってきた
　私はなんかかわいそうに思い力を貸すことにした
「分かりました、その妖怪のところに連れていってください」

戦ってみた

「ここがその妖怪の長がいるところですか」

私はそのなぜかイラッとするぐらい立派な館に入ることにした

すると館の前で二人の妖怪が現れ

「妖精ごときがこの館に何の用だ」

と言ってきたので

「私は弱小妖怪の代表としてやってきました長に会わせてください」

というと妖怪はいきなり笑い出した

「お前があいつらの代表だとあいつら妖精にも勝てんのか笑わせる」

といって二人は笑い続けた

私は少しイラッと来たので妖力を二人にぶつけ黙らせることにした

「おい、妖精なんだこの妖力は、長いやそれ以上だと・・・」

妖怪どもはそういってそのまま気絶してしまった

私は少し罪悪感がわいてきたがひとまず館に入ることにした

「やってくれたね、あんたのせいでこの館にいる妖怪はほとんどダメ

になってしまったよ」

と玄関先でいきなり大きな女性が話かけてきた

大きなといっても私基準だから普通より少し大きいぐらいだけど

「それはすいません、しかし少しイラッとすることを言われたものですから」

というとその女性は笑みを浮かべ館の中に入っていった

私はどうすればいいのか分からずうろうろしていたが

「どうした、話があるのだろう。おいで」

といってきたので私は館の中に入ることにした

女性は一つの部屋に入ると立派な椅子に腰をおろし

こちらも座るように言ってきた

「それで、いったい何のようだい」

と言ってきた

「弱い妖怪たちを戦いに出さないでほしいのです」

というと、女性はきょとんとしてしまった

「え、そのために来たのかい？一緒に戦わせてくれって言いに来たんじゃないのかい」

と不思議そうに尋ねてきた

「いやですよ。なんで戦わないといけないんですか。私は頼まれたんですよ」

そう言うと女性はしばらく考えこんで

「なら頼む、一緒に戦ってくれあんたが戦ってくれるのなら私たちはより勝利に近づくことができる」

と言ってきたが、私は戦うなんてめんどうくさいので

「すみません、戦うのはあまり好きではないんですよ」

というと女性は肩を落とし私の眼を見ていった

「悪いがあんたの言うことは聞けないね。私たちも結構ぎりぎりなんだ。これ以上戦力を減らしたくない」

私はこのままではまずいとおもい、ひとまず話を変えることにした

「ところで、あなたは、何の妖怪なんですか」

と聞くと

「あたしかい?あたしは鬼さ。この立派な角が見えないのかい」

と言ってきたが、私は正直なんかの動物かと思っていたがそんなことは言えそうもなかった

「なら条件を出そう、あたしと勝負しな。あたしに勝てたらその条件を飲んであげよう。ただし、負けたらそん時は、他の妖怪とあんたも戦いに参加してもらうよ」

と言ってきた。

「しょうがないですね。ところで貴方のお名前をお聞きしたいのですが」

というと女性はうなずき

「あたしの名前は百鬼(ひゃっき)っていうんだよところであんたの名前は」

百鬼ってなんか怖い名前だなと思ったがとりあえず質問に答えようとしたが前世の名前を言うのはどうかと思い

「私に名前はないんです。何かつけてくれませんか」

というと百鬼はしばらくうなっていたが私を見て

「そうだね、あんたは他の妖精に比べても力が強いからおそらく大妖精って言うやつだろ。なら大輔とか大五郎でいいんじゃない」

と言ってきたので

「私女です。そんな名前になるぐらいなら大妖精って呼んでください」

私はそんな名前になるぐらいならずっと大妖精でいいやと思った

その後私と百鬼は広場へ行き、準備を運動を始めた

しばらくして両者の準備が整ったら

「しっかり約束を守ってくださいね」

というと百鬼は当然とばかりに頷き

「あんたもまけたら、約束守りなよ、鬼は嘘が嫌いなんだよ」

といって笑みを浮かべてきた

一人の鬼が間に入ってきて審判を務めるようだ

「勝負」

というと私は一瞬で身体能力を全体的に高めた

百鬼はいきなり私にとびかかってきた

私はそれをよけながら弾幕を百鬼に向けてはなった

「なんだいそれは」

といいながらもきれいに百鬼はよけた

どうやらこの妖力の弾幕をここらの妖怪は使えないようだと思いながら私はどんどん弾幕を打ち出していった

百鬼はこのままではらちが明かないと思ったのか

弾幕にぶつかりながらこちらに突っ込んできた

「痛いじゃないか、こっちもお返しだ」

といって殴り掛かってきた

私は食らっても防御力も上げているので痛くはないと思うがその腕がうねりを上げて近づいているのを見て食らうのは怖くなり、その腕に自分の腕をぶつけた

どうやら私と鬼の腕力はほとんど互角のようで互いに吹き飛んでしまった

「冗談だろ、なんで鬼と妖精の力が互角なんだい」

鬼は驚いていたが私も驚いていた

力を上げているのにもかかわらず互角だというのは驚愕だった

私はこのままでは持久戦になると思い今度はこっちから仕掛けた

百鬼は先ほどの力を見て食らうのはまずいと思ったのかこんどは避け続けた

百鬼はひとまず距離をとりニヤッと笑った

「あんたの弱点を見つけたよ」

と言ってきたが私ははったりだと思いまた百鬼に向かって飛んだ

私はまた殴りかかったが百鬼は私を蹴り飛ばした

「あんたの弱点はそのリーチのなさだよ。あたしはあんたが懐に入る前にあんたを蹴り飛ばせばいいそれだけだ。だがあんた、今のを食らっても平気なのかいあたしは今ので、きめにかかったんだがね」

といって今度は百鬼が襲い掛かってきた

私はその蹴ってきた足をつかんだ

「なに！」

百鬼は驚いたようだが私は反撃させないためにそのまま百鬼を振り下ろしたあと弾幕をこれでもかというほど打ち込んだ

私はこれで決まったと思った

しかし百鬼はすぐに立ち上がりあたしを蹴り飛ばした

「今のは効いたよ。あたしの本当の力を見せてあげよう」

と言ってきたその瞬間私は何かに押しつぶされた

「どうだい、あたしの能力、重力を操る程度の能力は」

と言ってきたが、私はその言葉を聞いてよかったと思った

あたしはすぐに立ち上がった

それを見て百鬼は

「なんであたしの能力が効かないんだ」

と言ってきた

「よかったよ、重「力」で、それならあたしにも操れる」

といい私は重力を操り今度は百鬼を押し潰した

「なんで、あたしの能力がそれに重力が返せない」

驚いていたが、ただ単に私が返した分の重力をすぐに返しているだけだ

「降参してほしいのだけど」

私がそう言うと百鬼はもう勝てないと思ったのか

「しょうがないね、あんた・・いや大妖精おまえの勝ちだ」

と言ってきたので、私は重力を解き百鬼を自由にした

「本当に惜しいねあんたの力。私たちに貸してくれたら負けることはないと思うのだけど」

といってきたが私は戦う気はないので

「それじゃ、約束は守ってね私は帰る」

と言って百鬼に背を向けた

「ああ、約束は守るさ、後たまにはおいで歓迎するよ」

と言ってきたので私はまた来ようと思い今はこの場を離れた

「それで百鬼さんを倒したのかよお前」

久しぶりに来た妖怪さんに私はこの前の出来事を話した

「ところで妖怪さん、あなたの名前はなんていうの」

私がそう聞くと、妖怪さんは

「俺に名前なんかねえよ」

と言ってきたので私は名前を考えようとしたが妖怪さんと言うのが慣れてしまったのでこのままで行くことにした。

「ところで聞いたかい、人間どもはなんでもロケットとかいうので月に行くみたいだぞ」

と言ってきた

「えっ・・嘘でしょいやありえないよ。まだそんなに化学は発展していないはずだけど」

私はまだあの時からそんなに時は立ってないと思い、すぐに否定した

「といってもな、これは本当のことだぞ何なら見てきたらどうだ」

と言われたので私は久しぶりに人間の里に行くことにした。

「うそ・・・」

私の目の前にあるのは里ではなくもうなんかすごいものになっていた要塞みたいな鉄の塊だった

もう完全に都会だった

取りあえずはいろうかなと思い、入り口を探した

しばらくして見つけはしたのだが門番がいてどうやって入るか考えてみた

ケース1

「すいません、怪しいものではありません」

「羽が生えてるじゃないか、この妖怪め」

ダメだ

ケース2

「私は旅商人なのですが入れてもらえないでしょうか」

「お前は人ではないだろうこの妖怪め」

ダメだ

ケース3

「お腹がすいているのです助けてください」

「なら死ね妖怪」

ダメだ

全部追い出されてしまった

私はどうすればいいのか考えたがいい考えが全く浮かばなかった

その時奥のほうで悲鳴が聞こえた

私は五感を全て強化しているのでそれが聞こえ

私はすぐにその悲鳴のもとに向かった

そこで目にしたのは一人の女性がたくさんの動物に襲われていた

よく見ると足を怪我してしまっていた

私はすぐにその女性の前に出ると妖力をだし

動物たちを追い払った

「大丈夫ですか?」

私はこの森に薬の薬草を手に入れに来ていた

いつもはお手伝いさんが私の代わりにとりに言ってくれているのだが、どうやら妖怪に襲われて亡くなってしまったようだ

それならと私が取りに行こうと思い森に来たのはいいのだが

どこにあるのかもわからずにしばらく森をさまよっていた

するといきなりたくさんの動物が襲ってきた

私は持っていた弓で動物たちを追い返していたが矢が途中でなくなり必死に逃げていたが

私は逃げている途中根っこに引っかかってしまって

足をけがしてしまった

私はこのままではまずいと思ったが足をけがしてしまっていて頼みの弓も矢がないのであればどうしようもなくもうここまでかと思っていた

その時目の前に一人の羽の生えた小さな女性が現れた

するといきなりその少女からものすごい量の妖力が溢れてきて動物たちを追い払ってしまった

すると少女はこちらを向き安全を確かめてきた

「大丈夫ですか?」

別れのとき

私は女性が怪我をしていたので

女性の怪我を私に移して治癒力を上げ

女性に話しかけた

「あなたはどうしてこんなところにいるのですか？」

私が聞くと女性ははっとして

「薬草を摘みに来たのです。えっと危ないところを助けていただきありがとうございました」

女性はそう言って頭を下げてきた

「別にいいですよ。私は大妖精っていいます。あなたのお名前は？」

そう言うと女性は顔を上げ

「私は八意永琳といいます」

と言ってきた

「あのなんかお礼がしたいのですが」

と言ってきたが特にお礼はいらないので断ろうと思ったが

私は丁度いいと思い

「それならあの町の中に入りたいのですがどうしたらいいですかね」

と尋ねた

「えっ町の中ですかそれは難しいと思います」

と言ってきた。私はやっぱりかと思いながら他の方法を考えていたら

「えっと、なんで町の中に入ろうと?」

永琳が聞いてきたので

「いやロケットを見てみようかと思って」

というと永琳は驚き

「それだけですか?それなら私がどうにかしてお願いしてみます」

と言ってきた。

私は驚いたがなんかえらい身分の人なのかなとおもい納得することにした

「永琳様、後ろの妖怪は」

と門番が聞いてきたが永琳が何か説明したらすぐにとおしてくれた

「何を言ったの永琳」

私がそう聞くと

「あなたは私の助手ということにしましたこれなら町の中に入ることが可能でしょうから」

そういい私を一つの部屋に連れてきた

「これが開発中のロケットよどうかしら」

と言ってきたが私はそれどころではなかった

私が思っていたロケットよりずっと進んでいただが永琳の話を聞いているとまだこれでも途中らしい

しばらく見ていたが永琳が恐る恐る話しかけてきた

「あの、少しいいかしら。あなた本当に私の助手にならない」

と言ってきた私は少し考えたが別にまずいことはないかと思い

「いいですよ。でも私に手伝えることはあまりないと思いますが」

というと永琳は

「構わないわ。薬草を摘みに行ってもらうぐらいだから」

と言った。私もそれぐらいならいいかと思い承諾した

私と永琳はしばらく一緒に暮し私も理解力を上げ

ロケットの構造を理解し開発も一緒に手伝うことにした

「本当にあなたには頭が上がらないわ命を助けてもらうどころかロケットの手伝いまでしてもらって」

と言ってきたが私は住処や食事まで出してもらっているのだから別に構わないと思った

「それよりあとどのくらいかかりそうなの完成まで」

私がそう聞くと永琳が答えにくそうに

「あと3年ってとこかしらね、ねえ本当にいっしょに月に行かないの」

と永琳が聞いてきた

私は永琳が月に行くのに一緒に行かないか誘われていたが

私はここが好きなので断っている

「何度も言わせないでよ、私はこの場所が好きなの」

そう言うと永琳はため息をつき肩を落とした

「それより私明日から少しの間森に戻る」

というと永琳はわかったといい部屋を出ていった

「久しぶりに我が家に戻ってきた・・というか洞窟なんだけれど」

と一人で言っていたがいきなり後ろから声をかけられた

「久しぶりじゃねえか、どこ行ってたんだ」

妖怪さんだった何か不機嫌になっていたが

「久しぶりです妖怪さん。少し人間のところへ」

というと妖怪さんは目を見開き

「大丈夫だったか、何かされてないか」

としきりに心配してきた

「大丈夫ですよ、ところで聞きたいのですが妖怪さんは人間を襲うチームに入っているのですか？」

と聞くと

「いや俺は入っていない、入れ入れとうるさいが無視してる」

とっていた私は少し安心した

「そうですか、よかったです」

そういうと妖怪さんは何か渡してきた

「それもっとけお守りだ」

と言って黄色い布を渡された

「これってただの布じゃないんですか」

と私が言うと

「馬鹿を言うな俺の妖力を詰めてできている」

と言ってきたので

私はそれをどうやって使おうかと考え

布をリボン状にして髪をくくりサイドテールにまとめた

「どうですか」

と妖怪さんに聞くと

「まあまあ似合ってんじゃねえのか」

と言ってきたのでまあ良いかと思いひとまずリボンにいろいろな抵抗力を移し絶対にちぎれたりしないようにした

そしてまたのんびりと過ごした

2年が過ぎ私はそろそろ戻ろうかと町に向かった

私は永琳の部屋に行ったが誰もいなかったので勝手にお邪魔して待っていようと思いのんびりしていたら

いきなりドアが開いた

「どういうことよ、あいつら勝手にいろいろ言って」

なんか永琳は怒っていた

「どうしたの永琳」

私がそう声をかけると永琳は驚きそして顔を赤くしてしまった

「いやそのね今のはね、違うのよちょっと怒っただけで・・」

なんかいろいろ言っていたが

「いや別にいいですよ気にしてないですから」

そういうと永琳は

「それならいいわ、ところでずいぶんかかったわね」

と言ってきたどうやら永琳にとって2年は長かったようだ

「それよりどうしたの？」

そう聞くと

「実はねロケットの出発を早めるとか言って出発が3か月後になりそうなのよ」

と言ってきた

「ずいぶんと急だねどうして？」

私がそう聞くと永琳は困ったように

「どうやら、年寄りの人たちが年を取りたくないからって早く月に行きたがってるのよ。私じゃどうにもできなさそうだから・・・」

と言っていた

「それじゃ永琳と合えるのはあと3か月なのか」

私がそう言うと永琳は目を見てきて

「ねえお願い大妖精私と一緒に月に来て」

と言ってきた

「ごめんなさい、私はこの星を離れたくない」

私はそう言い永琳に背を向けた

「そうよね、ごめんなさい」

そういい二人とも無言になってしまった

しょうがないと思い

「それじゃ3か月はここにいるよ」

というと

「そうね3か月を楽しみましょう」

といってひとまず永琳は元気になった

3か月が過ぎ私と永琳は離れることになった

「それじゃ永琳」

私がそう言うと

「ありがとうね大妖精、またいつか会いましょう」

そういってロケットに乗り込んだ

私はそのロケットを見送った他にもいくつかロケットがあるみたいだが

次のロケットが放たれる直前いきなり声が聞こえてきた

「妖怪だ。妖怪の群れが襲ってきたぞ」

そう言って沢山の妖怪が襲ってきた

私は何故今？と思いながらその妖怪の群れに近づいた

その先頭には百鬼がいた

「百鬼どういうつもりもう、人間はいなくなるんだよ？なんで襲う必要があるの」

と聞くと百鬼は

「大妖精かいあたしたちは聞いたんだよ、どうやら人間どもが全員いなくなるとここらいったいが吹き飛ぶほどの爆弾を爆発させるってね」

私は驚いたそのようなものがあるだなんて

「なんで逃げないの」

私がそう聞くと百鬼は

「私たち妖怪はこの場所が好きなんだここを離れるなんて嫌だね」

私と同じことを言っていた

「大妖精あんたも手伝いな人間どもに爆弾の場所を聞きだし爆弾をどうにかする」

私は迷っていた

「爆弾を止めたらどうするの・・・」

私はそう聞くと

「人間どもを殺すに決まっているあいつらはあたしたちを殺そうとしてるんだよ」

といった

「ごめん、私は人間を殺したくない」

そういい顔を伏せた

「そうかい・・・それじゃいいよ早くこの場を逃げな」

そう言って百鬼は町に向かった

私は洞窟に向かった

洞窟の中には誰もいなかった

妖怪さんがいると思ったがどこにもいなかったもしかしたら町に向かったのかもしれない

その時どこか遠くで何か爆発したような大きな音がした

私はすぐに町に引き返した

「妖怪さんどこかにいますか！」

私は必死に妖怪さんを探した

何で妖怪さんを探すのかはわからないが私は妖怪さんを探した

周りにはいろいろな妖怪の群れが倒れていた

私はそれを一人一人確認して妖怪さんではないのを確認すると

すぐに他の場所へ向かい確かめた

しばらく探していたがどこにも見つからなかったのでこの街には来ていないんじゃないかと思い洞窟に帰ろうとした

その時一つの家の残骸の中から声が聞こえてきた

私はその声に聞き覚えがあり外れてほしいと思いながらその家の残骸をどかした

そこにいたのは妖怪さんでした

「お前か、無事だったみたいだな」

妖怪さんはそんなことを言ってほほ笑んできたが

「なんで妖怪さんがここにいるんですか。戦いには参加してないって言ったじゃないですか」

そう言うと妖怪さんは気まずそうに

「いやお前が街にいるって聞いたからな・・・」

そう言ってほほ笑んできた

「なんで私のためにそんなことになってるんですか。いつも通り自分の好き勝手にすればよかったじゃないですか」

私がそう言うと

「俺はお前が無事でいてほしかったんだよ。」

私は泣きながら

「なんでですか。私は・・」

私は妖怪さんのことなんて全く考えていなかったいつも自分勝手で気ままに生きていて私は・・・

もうどうしていいかわからなくなっていた

「すぐに助けます」

私はそう言うが、妖怪さんは

「いやもう無理だ、体の半分以上がダメになっているおそらく、もう長くはないだろう」

と言ってきた

「そんなことを言わないでください。生きてくださいよ」

私がそう言うと妖怪さんは首を振り

「もう無理なんだよ。最後なんだ笑ってくれよ。俺はお前の笑顔が見たい」

そういってぼろぼろの両手で私の顔を触ってきた

私はぼろぼろ涙をこぼしながら無理やり笑顔を作り妖怪さんにほほ笑んだ

「今まで楽しかったぜ。お前は死ぬんじゃないぞと言っても妖精だからすぐに生き返るか」

とふざけた感じで話掛けてきたがもう声も小さく虫の息になっていた

「私、妖怪さんのこと忘れません。ずっとずっとです」

「ああ、俺もお前のことは忘れない、俺の分まで生きてくれ。好きだったぜ大妖精」

そう言って妖怪さんは目を閉じた

「なんで最後にそんなことを言うんですか。名前も初めて呼んでくれましたね。今までありがとうございました」

私は泣きながら妖怪さんに頭を下げ

私はその場でしばらく泣き続けた

新しい出会い

どれだけの時間がたったかわからない

私は爆弾が爆発した穴の上を漂っていた

穴には雨が降ってたまったのか湖ができていた周りにも木が生えてきて

時間がたったのを感じさせた

でも私は何をすればいいのかわからずずっと湖の上を漂っていた

そしてまた何年もたち周りが騒がしくなってきた

どうやら他の妖精たちが生まれてきたみたいだ

私はそんなことどうでもいいかと思い、いつものように湖の上を漂っていた

すると何人かの妖精が私にちょっかいをかけてきた

「あんた邪魔なのよいつもいつも浮いていてどっか行きなさいよ」

そういって何人かの妖精が私に文句を言ってきた

「別にここはあなたたちの場所ではないじゃないですか」

私がそう言うと妖精さんたちが怒って弾幕を放ってきた

私はここの妖精は弾幕打てるんだと思いながら弾幕をどうしようかなと思っていると

いきなりどこかからか弾幕が飛んできて弾幕を相殺した

「あんたたち何やってんのよ。弱い者いじめはかっこ悪いわよ」

そういいなんか水色の妖精が割り込んできた

「何よあんた、どっかい来なさいよ」

妖精はそう言うが

「あんたたちいじめはかっこ悪いわよ。最強のあたいはそんなみっともないことを見逃せないわ」

そう言って妖精たちを追い払ってしまった

私はその妖精を見て他の妖精より力のある妖精だなとは思ったがそれっきり

興味を失いまた漂うことにした

「あんた、お礼も言えないの助けてもらったらお礼を言うのが常識よ」

そう言って水色の妖精は私に説教してきた

私はうるさいなと思いながら

「ありがとうございます。感謝します」

と言ってこの場を離れようとしたら

「あたいは最強だからね」

なんか意味の分からんことを言って私をつかんできた

「なんですか？」

私がそう聞くと

「あんた助けてもらったんだからあたいの子分になりなさい」

そう言ってきた

「すいません遠慮します」

そう言うと水色の妖精は

「あたいはチルノっていうのあんたの名前は」

「・・・大妖精っていいます」

そういうとチルノは頷き

「そう・・ならあなたのことはこれから大ちゃんって呼ぶわ。ついてきなさい」

そう言ってどこかに飛んで行ってしまった

私はめんどくさいなと思いながらチルノの後を追った

そしたら広い場所に出た

「ここはあたいの秘密の場所よ大ちゃんにだけ教えたんだから最強のあたいに感謝しなさい」

そう言って近づいてきた

私は落ち着く場所を教えてもらったので

「ありがとうございますえっとチルノさん？」

私がそう聞くと

指を振り

「ちっちっち、チルノちゃんでいいわよ」

なんかちゃん付けを要求してきた

私はまあいいかと思いちゃん付けにすることにした

「あたいは隊長だから大ちゃんは副隊長ね」

何かよくわからないが副隊長になってしまった

「えっとチルノちゃんいったいどういうこと」

そう言うとチルノちゃんは

「ダメね大ちゃんはさっき言ったでしょあたいは最強チームを作って世界を支配するのよ」

初めて聞いた

「無理でしょ」

私がそう聞くと勢いよくこちらを向き

「無理じゃないわ、なんてったって最強のあたいがいるんだから負けることはないわ」

そういって笑ってきた

私はその笑顔を見てすごいなと思った

この妖精はおそらく悲しいことがあっても笑うことができるのだろうと

私はもう笑うことはできなくなってしまった。

笑おうとしても顔が笑ってくれないのだ

「どうやって最強チームって作るの」

私がそう聞くとチルノちゃんは

「まずは仲間集めよそれから世界に乗り出すの」

といって話が終わった

おそらく何も考えていないのだろう

「あたいはあんたをずっと見ていたわ、何もしないでずっと湖の上を漂っていてそんなのつまらないわ最強のあたいが楽しいことを教えてあげるだからそんなつまらない顔をしてないで笑いなさい」

そう言って私の顔の頬を引っ張った

「チルノちゃん痛いよ」

私はそう言うがチルノちゃんは話してくれなかった

しかし私はこの感じが懐かしいなと思っていた

妖怪たちや永琳としゃべっている時と感じが似ていて懐かしくなった

「そうその顔よ」

私は知らない間に笑っていたようだ

「えっ嘘、私笑ってるの」

私は驚いたここ何年も笑えていなかったのにたったこんだけのことで笑うことができてしまっただなんて

「大ちゃんあたいが世界征服をするのはみんなが笑顔になるためよ。だけどいくらあたいが最強っていっても一人じゃできることは少ないわだから大ちゃんあたいのために力を貸しなさい」

そういって私に手を出してきた

私はチルノちゃんを見てそれもいいかもしれないと思ったチルノ

ちゃんと一緒にいれば

私はこの先が見えるかもしれない。今までもやがかかっていたような頭がはっきりしていくのを感じた。

私はチルノちゃんの手を握った

「分かった、チルノちゃん私チルノちゃんを全力でサポートするよ」

そう言うとチルノちゃんは笑い

「なら最強のあたいにふさわしい仲間を探しに行くよ」

そういって私の手を引っ張っていった

「ところでどんなのを仲間にするの」

私がチルノちゃんに聞くと

「あたいに任せなさい。カエルを凍らせているとカエルたちが諏訪子様にいいつけてやるっていってるの。そいつの親玉なら少しは強いかもしれないわ」

そう言ってどこかに向かっていった。私はチルノちゃんを追いかけながら

「カエルを凍らせたらダメだよ」

そういうがチルノちゃんは全く聞いてなかった

「ここね」

私たちは大きな神社の前に立っていた

「チルノちゃんここって神社だよ、大丈夫なの？」

私がそう聞くが

「最強のあたいがいるのよ心配することは何もないわ」

そういって神社の中に入っていった

「妖精ごときが何のようだい」

目の前に一人の少女が下りてきた

何やら変な帽子をかぶっていたがチルノちゃんはそんなことを気にしてなかった

「ここにいる諏訪子っていうのにようがあるのよ出しなさいあたいはチルノって言うのよ」

そういい少女に指を出した

すると少女はいきなり笑い出しこちらをにらんできた

「ほう、お前がチルノかカエルたちから報告は受けてるよ」

そう言って私たちを見た。ものすごいプレッシャーだった

少し驚いたがそこまで大したことないなと思いチルノちゃんを見ると

少し気分が悪そうな顔をしていた

「チルノちゃん大丈夫!?」

私はそういいチルノちゃんに妖力を分け与えた

「あれ、なんか平気になったわ」

そういうと少女は驚き

「驚いたね、妖精のくせに私の神力に逆らえるとはね」

どうやらこの少女は神様のようだ

「チルノちゃんこの人、神様みたいだよ逃げようよ」

私はチルノちゃんが心配で逃げるように言ったが

「大ちゃんは逃げてもいいわあたいは最強だから大丈夫よ」

そういって神様に喧嘩を売っていた

「そうかい、ならカエルたちのためにお前には罰を与えよう」

そういって先ほどよりずっと強い神力をぶつけてきた

私はこれはまずいと思い

チルノちゃんの前に立ち神力を押さえつけた

「なっ、お前本当に妖精か。ただの妖精が私の全力の神力に逆らうだと」

そういって驚いていた

「大ちゃんそこどきなさい危ないわよ」

そういって私の前に出てこようとしていたが

「チルノちゃん危ないから下がってて」

そういうが

「大ちゃんいいからどきなさいあたいは最強だから大丈夫」

と言ってきかなかったので

私は様々な力を移しチルノちゃんの後ろに立った

「あんた覚悟しなさいあたいの大ちゃんをいじめた罪は怖いわよ」

そういい少女に指を向けた

「あんたも神の神力に耐えることができるのか」

神は茫然と二人の妖精を見ていた

「諏訪子って言うのはあんたね最強のあたいの部下にしてやってもいいわよ」

チルノちゃんが諏訪子に向かって指をさして言った

諏訪子様は何を言われたのか分からなかったのか

私のほうを見てきて

「この妖精は一体何を言ってるんだい」

といって私に答えろと目で言っていた

「えっとチルノちゃんは最強になるために自分のチームを作ろうとして諏訪子さんに仲間になってほしいとお願いしてるんです」

というと

「いやこれ頼んでる態度じゃないでしょっていうかこの妖精は神を仲間にしたいといってるのかい」

諏訪子は呆れたのかため息をつきチルノのほうを向いた

「悪いことは言わない、もう帰れ私はもう疲れたお前に罰を与えるのはやめてやる」

そういって背を向けた

「食らえ」

その背中にチルノちゃんは弾幕を打った

「何やってんのチルノちゃん！」

私は思わずチルノちゃんの頭をはたいた

「大ちゃん痛いじゃない、戦いの途中に背を向けるのが悪いのよ」

そういってチルノちゃんは追加で弾幕を打った

いくらチルノちゃんに妖力を分けたといってもそこまで沢山分けたわけじゃない

おそらく無事だろう

「チルノちゃん今のうちに帰ろうよ」

私がそう言うとチルノちゃんは

「大ちゃん何を言ってるの最初が肝心なのよ上下関係をしっかり教えとかないと」

私とチルノちゃんが言い争いをしていると

「痛かったな今のは、覚悟はいいんだろうね」

諏訪子様はそう言ってチルノちゃんをにらみつけた

私はこの神様実はそんなに強くないんじゃないかと思った

私はそこまで沢山の力をチルノちゃんに与えたわけじゃないのに神様は今の弾幕結構効いてるみたいだった

「上等よあんたこそ覚悟しなさい最強のあたいには勝てないだろうけ

どね」

そう言い終わった直後にチルノちゃんは諏訪子様の後ろに飛び立った

「早い！」

諏訪子様はチルノちゃんのスピードに驚いたみたいだけどさすが神様と言うべきか的確に対処してきた

「あんたもなかなかやるわね」

チルノちゃんはそう言って余裕そうだったが

諏訪子様のほうは何もしゃべらずただずっとチルノちゃんを見ていた

「チルノちゃん油断しないでね相手は神様なんだから」

私がチルノちゃんに注意すると

「大丈夫よ、あたいは最強だからこれぐらいのハンデは上げるわ」

そういって私の話をちゃんと聞いてくれなかった

諏訪子様は鉄のリングを取り出しそれでチルノちゃんに攻撃してきた

「こんなの当たるわけないわ」

そういってチルノちゃんはかわした

諏訪子様はチルノちゃんを見てニヤッと笑った私はその理由に気付いて

「チルノちゃん後ろ」

そう言うとチルノちゃんは後ろを振り向いた

そこには先ほど投げたリングが近づいてきていた

チルノちゃんはかわそうとしたが攻撃に当たってしまい地面にたたきつけられた

「チルノちゃん大丈夫!?」

私は心配でチルノちゃんのもとに向かったそこには目を回したチルノちゃんがいた

取りあえず大丈夫そうなので私は落ち着いて諏訪子様をにらんだ

「何だい、その眼はその妖精の部下みたいだが、その子に勝てなかった私にあんたが勝つって言うのかい？」

と聞いてきた

「私はチルノちゃんの子分、だから私が勝ったらチルノちゃんが勝ったってことで言い？」

私はチルノちゃんが悲しむ顔を見たくなかったので諏訪子様に尋ねてみた

「別に構わないが、あんたが私に勝てるとでも思っているのかい？」

と言ってきたから

「勝つ自信はあるよ、チルノちゃんのおかげで大分疲れているみたいだしね」

私はそう言った

「いやその妖精の攻撃はあんまり効いていないが・・・」

と言ってきたが

「いや、あなたはつかれているだから私が勝ってもそれはチルノちゃんのおかげ」

「まあいいや、かかっておいで」

そう言ってきたので私は久しぶりに全身を強化した

その瞬間私の体から妖力が溢れ出てきた

「何だい、この妖力は」

諏訪子様は今までに感じたことのない妖力に驚いていたが

「それじゃいくよ」

私がそう言った瞬間諏訪子様は地面にたたきつけられていた

「一体・・なにが・・」

諏訪子様は何が起こったのか分からなかった

「今のぐらいかわしてよ神様なんでしょ」

私は空中で諏訪子様が地面に這いつくばっているのを見ていた

私がしたのは簡単だ単純に神様の上をとって蹴り落としただけだ

ただ諏訪子様には何が起きたのか分からないだろう。見えないのだから

「あんた本当に妖精かい」

諏訪子様は顔を苦くして尋ねてきた

「そうよ、私はただの妖精よ名前は大妖精よろしくね」

私はそう言い諏訪子の目の前に移動し手刀を諏訪子の首に差し出した

「私の負けだよ好きにしな」

諏訪子様は負けを認め目をつむった

「別にどうにもしませんよ私はチルノちゃんのかたき討ちをしただけですから」

そう言ってチルノちゃんのもとに向かった

しばらくしてチルノちゃんは目を覚ました

「大ちゃん・・あたいは負けたの？」

チルノちゃんは恐る恐る私に尋ねてきた

「大丈夫だよチルノちゃんチルノちゃんは勝ったよ。ねえ諏訪子さん」

私が諏訪子様に尋ねると諏訪子様は

「そうだね・・・あんたたちの勝ちだよ」

そう言って私たちを見つめていた

するとチルノちゃんはいきなり元気になり

「やっぱりあたいって最強ね。神様っていっても最強のあたいにはやっぱり勝てなかったようね」

そういってチルノちゃんは高笑いしていた

私はこっそり諏訪子様のほうを見たら

（あれ、絶対怒ってるよね・・）

何か顔に怒りマークがついていた

「諏訪子って言ったわねあんたなかなかやるからあたいの部下にしてやってもいいわよ」

チルノちゃんはそう言った

「チルノちゃん諏訪子さんは神様だからあんまり一緒にいることは無理だと思うよ」

私は遠まわしに仲間にするのは無理だといった

「なら仕方ないわね」

そういってチルノちゃんはあきらめたと思ったら

「ならしばらくここに私たちを住まわせなさい」

と諏訪子様に言った

「私も負けてしまったし仕方ないね」

諏訪子様はそういって私たちが住むことを認めてくれた

チルノちゃんは当然とばかりに頷いていた

私はこの先がとても不安になった

その夜諏訪子さんが私のところに尋ねてきた

諏訪子さんは私に

「あんた大妖精って言ったかい、なんであの子のことをそんなに気にかけてるんだい？」

と言ってきた私は不思議に思いながら今までのことを話して

「私は見てみたいんですよチルノちゃんの未来を。私が見たいものが見えるかもしれません今はまだ夢物語ですが私はチルノちゃんの夢に惚れちゃったみたいなんです」

と言って神様に背を向けてチルノちゃんのところに向かった

諏訪子サイド～おもわぬ強敵～

この二匹の妖精にあったのは全くの偶然だった

神社の入り口のあたりから小さな妖力が確認できたので私は一体どんな妖怪が来たのかと思い確認に行った

だがそこにいたのは二人の妖精だった

一人は水色の妖精でもう一人は緑色の妖精だった

私はこの二匹が何しに来たのか気になったので

「妖精ごとき。が何のようだい」

私がそう言うと水色の妖精が私に指をさし

「ここにいる諏訪子っていうのにようがあるのよ出しなさいあたいはチルノって言うのよ」

と言ってきた

その名前には私は聞き覚えがあったので

「ほう、お前がチルノかカエルたちから報告は受けてるよ」

と言って罰を与えようと思い

神力で押さえつけようとしたが

二匹とも耐えていた

いや水色のほうの妖精はダメそうだったが緑色の妖精が話かけると楽になったのか

すぐに調子に乗った

緑色の妖精は私が神様だと知った途端水色の妖精に逃げようといっていた

私はそれが常識だと思っていたが水色の妖精は構わずに私に喧嘩を売ってきた

私は今度は本気で神力を発揮しそのまま気絶させようとした

すると緑色の妖精が前に出てきて水色の妖精をかばった

私は本気でやったのにもかかわらず二匹の妖精が絶えていることに驚いた

すると今度は水色の妖精が前に出てこようとした

緑色の妖精がそれを止めようとしていたがそれにかまわず出ようとした

緑色の妖精はあきらめたのか水色の妖精に何かをして後ろに下がった

そしてこともあろうに私に対して部下になれと言ってきた

私は馬鹿にされてるのかと思ったが妖精ごときに怒ったらこっち

が子供だと思い

私はもうこいつには関わらないようにしようと思い二匹の妖精に背を向けた

その瞬間私に弾幕が降り注いだ

私はその威力に驚いた、たかが妖精だと思っていたがこの弾幕の威力は

大妖怪並みの力があったからだ

しかもその後追加で弾幕を打ってきたときにはまずいと思い

私はすぐにその弾幕を回避した

私は意識を戦闘用に切り替えた

そして妖精は一言私に言うとその場を消えた

そして次の瞬間私の後ろに気配を感じそんな簡単に食らうわけにはいかないと思い

私はその攻撃を避けた

私はよけたが背中がぞっとした正直ここまでとは思っていなかった

私は反撃の隙をうかがうためじっと妖精を見つめていた

緑の妖精が水色の妖精に油断しないように言っていたが水色の妖

精は私に対してハンデだといっていた

私は鉄でできたリングに神力を宿しそれを妖精に向かって投げた

妖精は当然のように避けたが私はもとよりあたるとは思っていなかったので妖精の後ろでリングが戻ってくるようにした

緑の妖精はそれに気付き水色の妖精に呼びかけたがもう遅かった

水色の妖精はそれに当たりそのまま落ちていった

緑色の妖精は水色の妖精のほうに向かっていった

水色の妖精の無事を確認すると私のほうをにらんできた

私はあの妖精の部下ならそこそこは戦えると思ったがあの妖精ほどではないと思い軽く挑発してみた

すると緑色の妖精は自分か勝ったら水色の妖精の勝ちってことにしてほしいと言ってきた

私は正直失望したこの妖精はちゃんとまともな判断ができると思っていたからだ

この妖精が勝てなかったのに緑の妖精が私に勝てるとは思えなかった

私はまた戦うのかと思い少し面倒だなと思っていた

その瞬間緑色の妖精からものすごい量の妖力が溢れてきた

私は驚いたこの妖力の量に大妖怪なんて目じゃないほどの妖力だった

正直勝てる気が全くしなかった

今よく考えてみればおそらくこの妖精はあの水色の妖精が私に負けると思い逃げるように言ったのだろう

「それじゃいくよ」

妖精が言った瞬間私は地面にたたきつけられていた

私は何が起きたのか全く分からなかった

すると上のほうから声が聞こえてきた

私はおそらくこの妖精に何かされたのだと気付いたしかし何をされたのか全く分からなかった

私はこの妖精に

「あんた本当に妖精かい」

と尋ねた私にはこの存在が妖精だとは思わなかったするとこいつは

「私はただの妖精よ名前は大妖精よろしく」

といってまた妖精が消え私の目の前に現れ私の首元に手刀を出してきた

私は自分の負けを認めた自分では決して勝てないと悟った

私は自分を好きにしなと言ったすると妖精は

「別にどうにもしませんよ私はチルノちゃんのかたき討ちをしただけですから」

といって先ほどの妖精のもとへ向かった

しばらくして妖精の目が覚めた

して緑の妖精に自分は負けたのか聞いた

すると緑の妖精は水色の妖精は勝ったよと言って私に同意を求めてきた

私は約束だったのでしょうがなく勝ちを認めた

すると水色の妖精はものすごく調子に乗り私を馬鹿にしてきた

私はものすごくイラついた

そしてこともあろうに私に部下になれと言ってきた

私はこの妖精に正直に言おうと思ったその瞬間緑の妖精が私をフォローしたから仕方なく見逃すことにした

その言葉を聞き水色の妖精は私の神社にしばらく住まわせろと言ってきた

私はこの二匹に負けたこともあったので仕方なくそれを認めた

「あんた大妖精って言ったかい、なんであの子のことをそんなに気にかけてるんだい？」

私は気になっていたことを大妖精に尋ねた

こいつほどの力があるなら別に一人でも全く問題ないと思っていたからだ

どう考えてもお荷物のアイツの部下になるような器とは思えなかった

すると大妖精は私に

「私は見てみたいんですよチルノちゃんの未来を。私が見たいものが見えるかもしれません今はまだ夢物語ですが私はチルノちゃんの夢に惚れちゃったみたいなんです」

と言ってきた

私は大妖精がただあの妖精の保護者としてついてきているのかと思っていただがそれは勘違いだったようだったその妖精の眼は過去に何かあったのか昔を思い出しているような目だった

そして大妖精は私に背を向けてどっかいってしまった

宣戦布告

私とチルノちゃんはしばらくその神社でのんびりしていた

諏訪子さんもやってきてよく3人で一緒に遊んだりしている

私が前世の記憶から何か面白い遊びを教えてそれをあきるまでやるというのが最近ではもっぱらだ

しかし最近諏訪子さんの顔が暗い

私は気になり諏訪子さんに尋ねてみた

「諏訪子さんどうしたんですか？なんか最近元気がないようですけど」

私がそう言うと諏訪子さんはため息をついて

「実はね、最近大和のほうの神々がいろいろなところから信教を奪っているみたいなんだよ今は大丈夫だけど、ここもいつまで大丈夫か・・・」

そう言って顔を下げてしまった

「何暗い顔してんのよ、最強のあたいがいるんだから大丈夫に決まってるじゃないそれより次の遊びを教えなさい大ちゃん」

いきなりチルノちゃんが割り込んできた

私はそんなチルノちゃんを見て相変わらずだなと思った

諏訪子さんもそんなチルノちゃんを見て気が安らいだのか笑みを浮かべていた

私はすることがないので参拝客を観察していた

「おいそこの妖精、これをここの神様に渡せ」

と言って知らない女の人が紙を渡してきた

「えっと、あなたは誰ですか」

そう言うと

「誰だと、妖精ごとき。が神に質問するなど身をわきまえろ」

そう言ってどこかに消えてしまった

私はひとまずこの渡された紙を諏訪子さんに渡すことにした

「・・・おい大妖精この手紙誰から受け取った」

諏訪子さんが手紙を読んで険しい顔でこちらに聞いてきた

「えっと、知らない人。いやたしか自分のこと神って言ってたよ」

私がそう言うと諏訪子さんは

「そうかやはり、大和のほうから宣戦布告が来た。戦争になる」

そう言ってため息を吐いた

「え、戦争って村の人たちは大丈夫なの？」

私が慌てて諏訪子に確認をとった

「大丈夫なわけないだろ神々の戦いだぞ、大勢死ぬ」

私はその言葉を聞いて

「なら私に任せて、神々は私が説得してみる」

といった

「な、危険だぞそれに説得できるとは思わない」

慌てて私にやめるように言ってきた

「私はもう、身近な人が死んでしまうのはいや、私が守れる範囲では私が守る」

そう言って屋敷を飛び出した

私は空を飛びながら先ほど現れた神の神力をたどり敵の本拠地に向かった

その時後ろから何かの気配を感じた

「誰！」

私は咄嗟に後ろを向き戦闘態勢に入った

「あたいをおいて行くとは、それでも大ちゃんはあたいの部下なの」

そこにいたのはチルノちゃんだった

「チルノちゃんなんでこんなところにいるの」

私はチルノちゃんに気付かれないように神社を出たのになぜここにチルノちゃんがいるのか分からなかった

「なんとなくこっちに大ちゃんがいるような気がしたのよ」

そう言って胸を張っていった

私はおそらくチルノちゃんから逃げるのは無理だろうと思った

「ねえチルノちゃん私が今から行くところは本当に危険なところなの。だから諏訪子さんのところに帰ってお願い」

私はそう言うが

「そんな危ないところに大ちゃんを一人で行かせるわけないじゃない。絶対ついて行くわ」

そう言って私の隣に付いた

(どうしよう、もし戦いになった時流石にチルノちゃんをかばって他の神たちとは戦えないし)

私はどうやってチルノちゃんを神社に帰らせるか考える

「大丈夫よ大ちゃん、あたいは最強だから何があっても大ちゃんを守るわ」

そう言って私の手を握ってきた

「分かった、なら絶対に私のそばを離れないでねチルノちゃん」

「分かったわ」

そう言ってどんどん前に飛んでいった

「ところで大ちゃんあたいたち今どこに向かってんの」

いきなりそんなことを聞いてきた

「え、今更！知らないの？」

私はチルノちゃんが前にいるし今からどこに行くのか知っているのかと思っていた

「あたいはなんとなく勘で飛んでいるだけよ」

そう言ってどんどん前に進んでいった

「チルノちゃんすごいね・・・」

私はもしかしたらチルノちゃんってものすごくすごいのかもと思った

「ごめんください」

私は大和の神がいる社につき門の前で声をかけた

「大ちゃん何やってんの？」

私の隣でチルノちゃんが首をかしげていた

「チルノちゃん、人の家に行くときはしっかりと声をかけないといけないんだよ」

私はチルノちゃんが将来困らないように忠告した

「私たちは妖精よ、そんなのいらないわ」

確かに私たちは妖精だけどそれはまずいんじゃ・・・

「でも私たちは一応大使ってことになってるから失礼なことをしたらダメだよ」

私がそう言ってもチルノちゃんは首をかしげていた

「大使って何？美味しいの？」

チルノちゃんは本気でそう言ってるから困る

「私たちが変なことをするとね諏訪湖さんが困るんだよ、いいのそれで？」

私がそう言うとチルノちゃんは驚いたような顔をして

「それはダメね、諏訪湖は私の友達だからね」

本当にチルノちゃんが分かってくれてよかった・・

そんな事をやっているうちに大和の神がやってきた

「お前らか門の前で騒いでいるというやつは。ここはお前らのような奴らが来るようなところではない。さっさと立ち去れ」

そう言ってこの神は私たちから背を向けた

ここで帰られたら私の立場がなくなってしまうので私はしょうがなく声をかけた

「私たちは諏訪大国の使者です。ここの神に合わせてください」

私がそう言うとこの神は興味を持ったのか私たちを見て

「嘘だったら、どうなるかわかって言っているのか」

そう言って見下ろしてきた

(あれ？チルノちゃんいつもなら言い返しているはずなのにどうしたんだろう？)

私はそう思いチルノちゃんを見てみると

「あれ？いない！どこいったのチルノちゃん」

私はいつの間にかいなくなっていたチルノちゃんに気づいた

「どうしたのだ急に、やはり嘘なのか」

「違います、ここにもうひとり妖精がいませんでしたか」

するとこの神は何を言っているんだというふうに

「もともとお前はひとりでいただろうが何を今更」

やばい、チルノちゃんもしかして・・・

私は神と向き合いしばらくお互いに無言になってしまった

すると門の中が何やら騒がしくなっていた

「どうしたんだ、何やら門の中が騒がしいな」

まさか、チルノちゃん勝手に入ってないよね・・・

すると直ぐに中から一人の神が出てきて

「おい、侵入者だお前も手伝え」

すると目の前にいた神はいなくなり私一人ぼっちになってしまった

どうしよう・・あれ多分チルノちゃんだよね。しょうがないか

「こっそり入ってこっそりチルノちゃんを連れて出ればいいか」

私はそう自分に言い聞かせて門をくぐった

「チルノちゃん、一体どこまで奥にいったんだろう」

チルノちゃんの居場所は妖力を追えばすぐにわかるんだけど

周りに神がたくさんいてなかなか奥に進めないな・・

「あたいに歯向かうとはいい度胸じゃない」

これ、チルノちゃんの声だ

私はそう思い直ぐにその場に向かった

「おい、虫ごときで、私達神に勝てると思っているのか」

チルノちゃんは何やら強そうな神様にタンカをきっていた

(チルノちゃん!何やってんの!)

しばらく向き合っていたがチルノちゃんは神様に突っ込んでいった

私は咄嗟にチルノちゃんと神様の間に入りチルノちゃんを抑えた

「チルノちゃんなにやってんの、私たちは迷惑かけちゃいけないって

言ったじゃない」

チルノちゃんは私を見て少し落ち着いたようだがまだ怒っていた

「だってあいつ、諏訪湖のことを馬鹿にしているのよ」

すると神様は私たちふたりを見て

「馬鹿にするもなにも神であるにもかかわらず妖精ごときに負けるんだ、そんな負け犬をどう言い繕っても無駄だろう」

そういって神様は笑っていた

私も少しムカついてきていたがとりあえず頼まれたことを済ませることにした

「私たちは諏訪大国の使者です、戦争について話し合いに来ました」

すると神は私たちふたりを見て更に声を高々とし笑った

「話し合いって何を一体話し合うんだ。お前らも所詮は妖精。話し合いになるはずもなかろう」

するといままで黙っていたチルノちゃんが

「なら私達と勝負をしなさい。それであんたらが負けたら私たちの言うことをなんでも聞きなさいよ」

そう啖呵をきった

「・・・・・・・くっくっくく、面白い妖精ごときがほざいたな。その

言葉身を持って味わうが良い」

「チルノちゃんとりあえず下がってここは私がやるよチルノちゃんが出るまでもないよ」

私はそう言ってチルノちゃんと交代しようとした

「大ちゃんここは最強の私に任せなさい」

そう言ってなかなか変わろうとしない

「チルノちゃんは私のリーダーだからリーダーは最後だよ」

とりあえずおだてていたら変わってくれるだろう・・・

そう思っていたが

「大ちゃんリーダーはね最初に立ち向かわないといけないのよほかのやつに任せるようならそれはリーダーとは言わないわ」

なんでここでそんないいセリフを・・

「私が戦いたいな、諏訪湖様の時はチルノちゃんが頑張ったでしょだから次は私にやらせて」

そう言うとチルノちゃんはやっと納得したのか

「そうわかったわ、でも危なければすぐに交代よ」

そう言って私の後ろに下がっていった

「別に妖精ごとき二人同時でも構わないぞこちらは」

そう言って神は腰を下ろしたまま私たちを挑発した

しょうがないか・・・

「それじゃ、もしあなたが勝った場合どうしますか？」

私はにっこり笑いそう尋ねた

「もしだと・・・私に勝てるとでも思っているのかひねり潰すぞ」

そういい、威圧してきた。

確かに諏訪湖よりは威圧感があるが正直どちらもどっこいどっこいだ

「ここまでコケにされたのは久しぶりだ。おい妖精名はなんという」

「人に尋ねるときは自分からじゃないんですか」

私がそう言うと神はニヤリと笑い

「いいだろう、私の名は八坂神奈子、心に刻み込んでおけ」

「私の名は大妖精。直ぐに終わると思いますが覚えといてください」

「そうか・・こい大妖精」

「行きます加奈子」

その言葉が合図になったのか終わった途端に加奈子は御柱を投げつけてきた

私は諏訪子みたいにすぐ終わったらつまらないと思い、いつもより軽めに自己強化をし御柱をかわし加奈子に接近した

「何！それなら」

そういい素手で殴りかかってきた

あんた神でしょ、素手はずるくない！

私はそう思ったが真っ向から受けた

「なんだと、受け止めただと」

私はそのまま拳を掴み加奈子の神力を自分に移した

「うっ・・これは意外ときついですね」

「神の力を妖精が吸いとるだと」

「このままではあなたの力を全て吸い取ってしまいますが降参してくれませんかね」

私が言外に降参しないならお前を消すぞというと

加奈子は負けを認めたのか力を抜き

「わかったよ降参だ大妖精お前の勝ちだ」

そう言ってきたので私は手を離した

しばらく周りがあっけにとられていたが

その中から一人飛び出してきた

「さすが大ちゃんね、あたいの部下なだけあるわ」

すると周りもこの事態に気づいたのか私たちを見て殺気立っていた

「やめないか、私が負けたんだこのけじめは私が取る」

加奈子はそういい私たちの方を見てきた

「それでお前らの目的はなんだ」

加奈子はそう私たちに聞いてきた

「私たちが来た理由は諏訪大国との戦争をやめてほしいということです」

私がそう言うと諏訪湖は少し気まずそうになり

「悪いがそれは無理だ・・」

と言ってきた

「ちょっとあんたさっきなんでも言うこと聞くって言ったじゃないの」

チルノちゃんはそう言って加奈子に掴みかかっていた

「チルノちゃん待って、なにか理由があるんですか？」

私がそう聞くと

「この戦争は私一人のものじゃない、。止めることはおそらく不可能だろう」

「それならどうにか被害を防ぐ方法はないですか？」

私は村人たちだけでも守りたくそう聞くと

「・・・それなら一騎打ちならどうだ？」

「一騎打ち？」

「そうだ、こちらの代表とそちらの代表で戦い勝った方が勝者だ」

「分かりました。日取りと場所はこちらで決めさせてもらいますがよろしいですね」

私がそう聞くと加奈子はにっこりわらい

「ああ、わたしはお前に負けた。それぐらいなら構わない」

私はひと段落着いたと思い帰ろうと思いチルノちゃんを見ると

「ＺＺＺ」

寝てる！驚いたまさか寝ていたとは

どうしよう・・・

「・・・今日は泊まっていくかい?」

加奈子がそう聞いてきたがここにいると明日が迎えられそうもないので

「辞めときます。さっきから殺気がとんできますので」

私はそういいチルノちゃんを起こした

「ＺＺ・・大ちゃん?終わったの?」

寝ぼけているが起きたみたいだったので

チルノちゃんを背負い私は大和を後にした